



歴代の日本母性看護学会理事長が語る 「前原澄子初代日本母性看護学会理事長の思い出」

今年のニュースレターには、大変さみしい特集を掲載することになりました。すでにご存じの方も多いと思いますが、日本母性看護学会を創設された初代日本母性看護学会理事長の前原澄子先生が5月にお亡くなりになりました。特にゆかりの深い先生に追悼記事をご執筆いただきま

した。初代理事長から現在に至る理事長までまさに、この学会をけん引くださった先生に、前原先生を偲んでご依頼いたしました。

他の記事は、例年と同じ構成ですが、特に学会の新しい動向をお伝えしたいと考え、記事を構成いたしました。

私と学会との出会い

日本母性看護学会 理事長 鈴木 幸子 (埼玉県立大学)

前原先生は私の学部、大学院を通じた恩師であり、卒業後も継続して日本母性看護学会や日本母性衛生学会の幹事や理事の仕事を通じてご指導をいただいていたので、いつまでも先生と学生との関係が続いていく期待(幸せ)を抱いていました。突然の訃報に接し、悲しく未だに心の収まりがつかずにいます。

先生は私たちが学部を卒業する際に(母性看護学分野の卒研発表会の後?)、日本母性衛生学会の入会申込書を手渡されました。言われるがままに申込書を書き入会して、次の年から学術集会に参加しました。1年目の私にとって、学会や学会誌で取り上げられるテーマは興味深くまた身近でもあったので討論やその雰囲気を感じ、現在に至ります。さりげなく学会との出会いを誘導してくださったことに感謝しています。

さらに、30代前半、教員の仕事と家庭生活の充実に精力を傾けていた時「もう子どもも大きくなったのだから、大学院で勉強しなさい」と声をかけてくださり、当時末子が2歳でしたが「そうか、大きくなったんだ」と妙に納得し、大学院に進みました。仕事を終えて帰宅すると疲れてろくに論文も読めない兼業学生でしたが、素晴らしい学友や先生方との学びの環境に身を置いただけで濃厚な滋養を吸収したと確信しています。

現在は理事長として学会を運営する立場ですが、会議の時の前原先生の凛とした佇まいを思い出し、毎回、会議の運び方を反省する次第です。学会創設時の前原先生の願いでもあった、日本学術会議協力学術研究団体への登録資格(会員のうち研究者が過半数)まであと一歩です。学会が名実ともに母性看護学の学問的基盤

と実践知の源であるために、前原先生が私たちにしてくださったように、私も学会を通じて若

い人を応援していこうと思っています。

前原澄子先生が思い出に変わる日はくるでしょうか

日本母性看護学会 元理事長 高橋 眞理 (順天堂大学)

人との出会いが運命を変えることがありますね。私にとって前原澄子先生の存在は、まさにその人です。先生と出会っていなければ私は助産師いえいえ看護の道へも進んでいなかったし、母性看護学の大学教員にもなっていなかったでしょう。今となっては、母性看護学の教育・研究抜きの自分は想像もできませんが。

澄子先生との最初の出会いは千葉大学教育学部「母性看護学」の講義でした。「母性看護学とは健全な次世代の育成を目指します」という先生の力強い一言、そして30代後半での新進気鋭の先生の存在は、私にはあまりにも衝撃的でした。その後、卒業研究のご指導、助産師学校進学、大学教員への道、本学会前理事長など、先生のお力添えがなければあり得ないことでした。

私にとって本当に先生の影響力は絶大であり、何を書こうか迷います。でも、ひとつなら、人生の階段をひとりで昇りはじめた20代の頃の先生からの一言でしょうか。この頃、千葉大学

では毎月1回、MCN (Maternal Child Nursing) の抄読会が開かれており、私も参加してました。英語が苦手な私は、論文内容よりもそこでのユーモアに飛んだ先生の会話の方がとても楽しみでした。とある時に、どなたかが仕事うまくいかなかった理由を若い人のせいと話した時、先生は「敗戦の将、兵を語らず、知ってますか。」とおっしゃいました。この言葉は今も肝に銘じており、誰かのせいにしたくなるといつも心の中で澄子先生が私に言ってくれます。先生は本当にカッコいいですよ。

母性看護学とは何かを知り、母性看護学と前原澄子先生に魅せられ、先生の後ろ姿を追いかけて、本当に多くのことを学んでいます。先生は、人を引きつける絶大な魅力があり、多くの人がこの魅力に引きつけられました。私にとって先生は偉大な研究者と同時に偉大な教育者として、生き続けています。いつの日か先生が思い出に変わる日がくるのでしょうか。

日本における母性看護学の第一人者である 偉大なる恩師を偲んで

日本母性看護学会 前理事長 森 恵美 (千葉大学大学院)

前原澄子初代理事長は、本学会の設立前、私が母校の教員になった当時から、母性看護学の学問としての体系化への取組みが遅れていることを憂慮し、それによる学術的な発展が立ち遅れに気づいておられました。その気づきから、学会設立へと多くの同志を得て、強力なリーダーシップを発揮され、本学会を設立なさられたお姿は今も覚えております。まさに、前原初

代理事長は、本学会の産みの親であり、育ての親でありました。前原先生の母性看護学の主概念は「次世代の育成と継承」であり、私の学部生時代から、母性看護学の教科書執筆、教育研究等においてその主概念は首尾一貫しておりました。前原初代理事長が、日本における母性看護学の第一人者であることは、多くの看護学教育研究者が認めるところであると思います。

初代理事長前原先生との思い出はもう一つあります。平成19（2007）年度学術集会の前日の理事会で2009年度の学術集会長が決まらず、欠席であった私を初代理事長指名で学術集会長として仮決定したという出来事です。翌日、学術集会会場に行くとすぐに前原先生に話があるとされました。前原先生と田邊先生のお二人に囲まれ、「森さんしかない」と学術集会長を承諾するように説得を受けました。私と前原先生の師弟関係では「お断り」という言葉はなく、お引き受けいたしました。しかし、当時は

まだ会員数も少なく手弁当の学会運営でしたので、私の教室の所属教員・学生には多大な協力を得ることになりました。当時の教員は本学会会員で、前原先生のご威光もあり力を集結してとても充実した学会になりました。恩師の偉大さを身に染みて感じた思い出です。前原初代理事長のご意思やご矜持を引き継ぎ、見守られ、第3代理事長を務め、学会の発展に尽くさせていただきました。ここに長年にわたる先生のお導きに心より感謝を申し上げ、一会員として学会発展に尽くすことを誓いたいと思います。



学会誌がオンライン化されました

—締め切りを気にせず、お早めに投稿をお願いします—

編集委員会担当 理事 大月 恵理子（埼玉県立大学）



日本母性看護学会においても、2019年7月より、随時オンライン投稿査読システムを導入し、冊子体の発刊から電子ジャーナルでの発刊といたしました。電子ジャーナル化とともに新体制となった不慣れな編集委員会といたしました。7月に論文投稿が殺到したらどうしようと戦々恐々としておりましたが、まだ、会員の皆様の認知度が低いのか、随時投稿が始まっても、残念ながら投稿が激増するような事態はございません。そのため、この場をお借りして、皆様に電子ジャーナル化の経緯をご説明し、論文投稿のお願いをさせていただきたいと思っております。

(1) オンライン投稿および電子ジャーナル化の経緯

さて、本会での電子ジャーナル化の経緯ですが、2017年の第1回理事会時に石井編集委員長

より、投稿論文数が増えてきたことと、そのためより多く、迅速に研究成果をお届けするための検討が必要と提案されました。まずは、年に2回の学術誌の刊行を準備したいことが提案されましたが、印刷費と送料などの経費を考慮し、さらには「迅速」におとどけするため、電子ジャーナル化と随時投稿のシステムが必要ではないかと意見交換されました。電子ジャーナル化を2019年度からと見据えて、準備を進めました。まず、オンライン投稿査読システムと電子ジャーナル編集について、複数の業者より説明を受け、見積もりを取り、2017年3月の理事会で検討した結果Scholar One Manuscripts : SIM（杏林舎）によるオンライン投稿査読システムを採用し、投稿支援は従来通りガリレオに委託し、電子ジャーナルの編集とJ-stageへの登録を正文社に委託することとしました。

オンライン投稿や電子ジャーナル化に伴い、投稿規程を電子投稿用に改定する作業も必要であり、検討の結果承認された新たな投稿規程がホームページに掲載されています。そして、7月1日より随時の電子投稿が始まりました。

(2) 日本母性看護学会のオンライン化の特徴・投稿方法について

契約した杏林舎はSIMを利用しており、これは、日本看護科学学会や日本助産学会、日本母性衛生学会も採用している方式で、皆様にもなじみがある方式のため、投稿しやすく、かつ査読者にとっても、使用しやすいのではないかと思います。執筆要領につきましては、これまで本原稿と査読用（著者情報を伏せたもの）の2種類を提出してもらっていましたが、査読用の論文のみへと変更いたしました。それ以外の変更はございません。電子投稿システムにそって、著者アカウントを作成し、論文種別、和文タイトル、和文抄録を入力し、査読用の本文原稿（投稿者が特定される文言を伏せたもの）をアップロードし、キーワードおよび研究方法（質的研究、量的研究、混合研究法）のチェックを行い、著者を登録し、設問（投稿チェック票）のチェックを行い、確認して投稿終了です。まずは、HPのオンライン投稿マニュアルをご確認いただき、まだ論文が完成していなくても、オンライン投稿システムをクリックし、著者アカウントを作成しておきましょう。

また、電子ジャーナルについては、紙面構成はこれまで通り正文社に委託するので、これも、いままで冊子体でご覧いただいていた会員の皆様にも違和感のなくご覧いただけると思います。そして、J-stageにも搭載いたしますので、どこからでも簡単に閲覧することが出来ます。これは、投稿者にとっても広く、読んでいただける機会となると思います。

そして、会員の皆様への一番のメリットは随時・迅速ということです。これまで年1回、9月締め切りで翌年3月発刊というペースでしたが、早ければ9月投稿翌年1月発刊ということもでき、今のところ、秋と春の年に2回程度の発刊を予定しております。これは、投稿者にとってもかなり有利であると思います。そして、読者側の会員にとっても、新鮮な研究成果が得られることは日々の教育・実践に重要であると思います。

しかしながら、文頭にも記載いたしましたが、周知不足か、まだ投稿論文が例年より少ない状態です。そのため、逆に編集作業に移れておりません。それでも、できるだけ早期の発行を目指し、編集委員と査読者の先生方と作業を進めております。「随時」投稿が少々皆様の油断を招いているのかもしれませんが、ぜひとも多くの論文を投稿いただけますよう、編集委員一同楽しみにお待ちしております。

「糖代謝異常妊産褥婦への看護支援セミナー」のさらなる充実

生涯学習支援委員会 GDM セミナー部会担当理事 成田 伸（自治医科大学）

日本母性看護学会では、周産期・育児期を専門とする看護職が、周産期・育児期の糖代謝異常に関わる科学的に正しい情報を獲得し、適切に支援できることを目的に、2016年度から本セミナーを開始しました。大阪、東京、岡山と開催し、2019年度は仙台（東北大学）で開催します。このセミナー開催には長い歴史があります。

2005年に診療報酬における学術的エビデンスに基づいた適切な看護評価の構築提言を目的に、看護系学会等社会保険連合（看保連）が立ち上がりました。成田は、本学会戦略的プロジェクト担当理事として看保連の委員となり、母性看護学・助産学領域で診療報酬に申請できる看護技術の探索にかかりましたが、妊娠・出産関係

は自費診療の世界で、診療報酬に絡む課題の探索は困難でした。そのような中、日本看護協会長の福井トシ子氏より、周産期の糖代謝異常にもっと助産師がかかわって欲しい、研究者として推し進めて欲しいとの意見を頂きました。2013年春のことです。

文献検討を進め、研究計画書を立ち上げ、2014年挑戦的萌芽研究「妊娠糖尿病女性への妊娠糖尿病認定助産師による産後継続支援に関する多施設共同研究」の研究資金を獲得しました(2017年度からは基盤研究(C)(一般)「助産外来を活用した妊娠糖尿病女性への妊娠分娩産褥期の継続的な支援への介入評価研究」に移行)。2014年最初に行ったのは、助産師を対象としたセミナー開催です。助産師は糖代謝異常が苦手、糖代謝の内科で働く医療職は周産期が苦手との報告が多くあり、まずはこの苦手克服が必要と考えたためです。このセミナーが、現在の本セミナー開催につながっています。

アドバンス助産師絡みで、現在ではGDM関係のセミナーが多く開催されていますが、本セミナーは他のセミナーと大きく異なっています。それは「GDMとは何か」ではなく「DMとは何か」から始まることです。それだけ助産師とDMの間には距離があると気づいたからです。この違いは今に至っても変わらないと自負しています。

糖尿病の血糖コントロールには、食事、運動、

インスリンの使用が複雑にからんでいます。周産期においてその調整がうまくいかないと、母体の低血糖・高血糖、母体の体重増加不良・体重の過剰な増加、胎児の体重増加不良・過剰な体重増加が生じます。母体の体重増加・胎児の体重増加のアセスメントし、その背景で生じている生活に関わることができるのは、助産師です。また将来的なDM発症予防には、母乳育児の継続と非妊時体重への早期復帰が重要です。つまり、DMの仕組みを知れば、助産師は周産期糖代謝異常妊産褥婦の一番の支援者になれるのです。

さて、2019年6月看保連経由で、GDM産後支援に関わる2020年度改訂診療報酬改定要望書を提出しました。現行の「在宅妊娠糖尿病指導管理料」に入っていなかった産後受診時の保健指導の加え、できれば助産師が望ましいとしたもので、小規模の要望ですが、承認されれば、大きな変化を起こすことを期待しています。

セミナー開催を通じ、GDMに限らず、周産期の糖代謝異常妊産褥婦を支援することは、女性のその後の人生をより健康で過ごしていくために非常に重要と思うようになりました。今後ともこの視点を、セミナーを通じて皆様にご知っていただくよう頑張りたいと思います。

セミナー開催情報は日本母性看護学会HPより入手ください。

母性看護専門看護師を様々な角度から支援する

～高度実践看護師育成推進委員会の最近の動き～

高度実践看護師育成支援委員会担当理事 松原 まなみ (関西国際大学)

高度実践看護師育成推進委員会は、母性看護領域における高度な看護実践を提供できる人材を育成し、その活動を推進する目的で設置されました。「戦略的プロジェクト推進委員会」の活動を発展させ、2017年度に独立した委員会となり、今年で発足3年目になります。

当委員会では、母性看護専門看護師(CNS)

の育成を支援する活動として、関連学会で母性看護CNSの紹介チラシを配布したり、複雑で高度な看護実践を必要とする問題を抱える妊産褥婦や女性に適切なケアが提供されるよう、その推進役を担う母性看護CNSが適正に配置されることを目指し、周産期センターへの母性看護CNS配置や、母性看護CNS教育課程への進学を

呼びかける活動をしています。9月には全国の総合周産期母子医療センターにチラシ（掲載）を送付しました。

昨年末からは、当委員会の企画で『助産雑誌2019年1月号～12月号』に母性看護CNSの実践

報告を連載中です。

本学会のHPに母性看護CNSのページを新設し、活動の紹介や母性看護CNSが主催する研修会のご案内などの記事を掲載する予定で準備していますのでご覧ください。

**複雑で解決困難な看護問題を持つ女性や家族のために
母性看護専門看護師が求められています**

**母性看護専門看護師を
目指してみませんか？**

専門看護師は複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族・集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供するために、専門看護分野の知識・技術を深めた専門家です

教育：看護系大学大学院修士課程
専門看護師資格の認定：日本看護協会

2018年4月現在、
母性看護専門看護師73名が
全国で活躍しています。

専門看護師の6つの役割

- 個人、家族及び集団に対して卓越した看護を実践する。(看護)
- 看護者を含むケア提供者に対しコンサルテーションを行う。(指導)
- 必要ケアが円滑に行われるために、保健医療福祉に携わる人々の間のコーディネーションを行う。(調整)
- 個人、家族及び集団の権利を守るために、倫理的な問題や葛藤の解決をはかる。(倫理調整)
- 看護者に対しケアを向上させるための教育的役割を果たす。(教育)
- 専門知識及び技術の向上並びに開発をはかるために実践の場における研究活動を行う。(研究)

**母性看護専門看護師の
教育課程**

- ① 周産期母子援助(助産師)
- ② 女性の健康支援
(看護師・保健師も取得可能)

【教育機関】
京都府立医科大学
大阪府立医科大学
北里大学大学院
自治医科大学大学院
兵庫医科大学大学院
山形県立保健医療大学大学院
慶応大学大学院
富山大学大学院
三重県立看護大学大学院
聖マリア学院大学大学院

聖路加国際大学大学院 (◎のみ)
(38単位達成機関：11課程)

《お問い合わせ等 連絡先》
日本母性看護学会 事務局
TEL:03-5981-9824
e-mail: j031jnmn-support@nml.ekkkai.ne.jp

日本母性看護学会高度実践看護師育成支援委員会

**母性看護専門看護師は、周産期医療の現場や
女性の問題を解決するパイオニアです**

母性看護専門看護師は、熟練した高度なケア技術とキュアの知識を用いて、ハイリスク妊産婦、胎児・新生児、女性の生命の危険状態や病態をアセスメントし、健康の保持増進や重症化への防止に対応する能力を有する高度実践看護師です。女性とその家族に予防的・継続的な介入を行い、女性のセルフケアを高リスクをコントロールすることにより、健康アウトカムの向上を目指す。直接ケアのみならずスタッフや組織に対するコンサルテーションや教育的役割、組織人を集く調整役割を担う臨床実践の改革者です。

母性看護専門看護師 11名

2018年1月現在、70名の母性看護専門看護師が活躍しています。しかし23都道府県で不在、総合周産期母子センターの22%で配置されているに過ぎません。ハイリスク妊産婦が増加し、高度・複雑化している周産期医療の確保の原動力、産婦やDVなど女性や母子・家族の健康を守るために不可欠な存在である母性看護専門看護師の数は不足しています。高度で専門的な実践を必要としている女性や家族の問題を解決してみませんか？
周産期医療の現場は
貴女力を求めています！

【母性専門看護師が
医療機関に与えるメリット】

- 1) 看護職や職員に教育的に関わり看護の質や倫理的感性を高める
- 2) 妊産婦や家族に質の高いケアを提供する
- 3) 自施設や他の医療施設、行政機関の多職種との連携や調整を中心となつて行う
- 4) 組織の問題を分析し、解決のためのシステムづくりを行う
- 5) 経済的な効果を生みだし病院経営に役立つ
- 6) 研究発表や執筆等のCNS活動を通じた自施設の広域を行なう
- 7) 共に働く看護職の負担を減らす

母性看護学会は母性看護専門看護師育成をサポートします。
お問い合わせ等 連絡先：日本母性看護学会 事務局 TEL:03-5981-9824
e-mail: j031jnmn-support@nml.ekkkai.ne.jp

第21回日本母性看護学会 学術集会報告

第21回学術集会長 大平 光子(広島大学大学院)

第21回日本母性看護学会学術集會を、2019年6月15日(土)、広島市のJMSアステールプラザ、および、広島市文化交流会館に於いて開催いたしました。朝から雨が降る中での開催となりましたが、会員216名、非会員476名、学生2名の合計694名の参加者があり、盛会のうちに無事終了いたしました。会場は朝から満員で、シンポジウム終了まで残ってくださった参加者も多かったようです。一般演題は、59演題(口演：24題、示説：35題)と多くの方に発表していただき、活発なディスカッションが行われていました。

また、学術集会前日にはプレコンgresとして、CLoCMiP関連のセミナー「周産期におけるメンタルヘルス支援～妊娠期からの医療機関と行政機関の連携～」 「周産期の糖代謝異常の考え

方と対応フィジカルアセスメント～代謝～」 「産後うつ予防にむけた心理教育的育児介入プログラムWWW T日本版の紹介と実演」の3つのセミナーを企画いたしました。想定していた以上の200名を超える方から申込みがあり、急遽会場を変更して開催することになりました。

今回の学術集會では、マタニティサイクルとライフサイクルの有機的連続性の中で、全ての人が真に多様性を尊重されながら未来に向かい、その人らしく自分の力を発揮して生きることを支えるケアや多職種連携・協働による支援の在り方について、ともに学び探究したいと考え、メインテーマを「マタニティサイクルとライフサイクルの有機的連続性～多様性の尊重が未来を拓く～」といたしました。

特別講演では、子どもの虐待と脳の発達に関

する脳科学研究の国際的な第一人者である、福井大学子どものこころの発達研究センター教授友田明美先生をお招きし、「虐待により傷ついた脳のライフサイクルへの影響」について最新のエビデンスや育児困難に悩む親に寄り添う「とも育て（共同子育て）」の重要性をご講演いただきました。教育講演では、児童青年期精神医学の分野で乳幼児精神保健や子ども虐待予防の臨床・研究に携わっておられる九州大学病院子どものこころの診療部准教授山下洋先生に「アタッチメント形成における周産期メンタルヘルスの意義」についてご講演いただきました。また、周産期からの子ども虐待予防やケアに関する実践と研究を重ねておられる武蔵野大学看護学部教授中板育美先生には「『親を理解したい』から始まる支援」についてご講演いただきました。子ども虐待予防に関するトピックは大きな社会問題となっていることから、参加者の興味関心も非常に高い内容であったようです。「孤育て」ではなく「とも育て」ができるような社会になるように、母子の未来を考えながら関わっていききたい、などアンケートでも多くの感想をいただきました。

また、シンポジウムでは、「子育てにおいて多様性を尊重し家族が持つ力の発揮を支援する多職種連携・協働」に関して、異なる専門的立場から、子育てにおける親・子ども・家族の多様性を尊重し、対象者の立場に立った先駆的な取り組みについてご報告いただき、多様性を尊重し家族が持つ力の発揮を支援する多職種連携・協働について討論し、今後の子育ての支援につながるヒントを得ることができました。

そのほかにも、母性看護専門看護師実践報告会や交流集会など、多くのプログラムを準備しておりましたので、アンケートでは「興味深い内容ばかりで口演発表に参加できず残念でした」「どのプログラムも興味深くすべて聞きたかったです」といった声も聞かれました。しかし「メインテーマに沿って講演の内容につながりがあり、非常に理解が深まった」との評価もいただき、参加者の皆様に学びを深めていただくことができたのではないかと考えておりま



特別講演の友田明美氏



交流集会にて



ポスター発表会場にて

す。運営面では受付に関する不手際や2つの会場をご移動いただくなどご不便をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

最後になりましたが、講師の皆様、ご参加くださいました皆様、本学会理事、査読者の皆様、企画から当日の運営までご指導、ご助言をはじめ、多大なご協力、ご支援を賜りました企画・運営委員の皆様、実行委員の皆様、ボランティアの皆様、学術集会開催に関わってくださった全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

第22回日本母性看護学会 学術集会のご案内

第22回学術集会長 島袋 香子（北里大学）



第22回日本母性看護学会学術集会は、2020年6月28日（日）に北里大学白金キャンパスで開催させて頂くことになりました。テーマは、「母性を支える看護力—叡智を实践へ」といたしました。令和の時代を迎えましたが、母性を取り巻く課題は、益々複雑な様相を示しており、子育てに関わる不幸なニュースが心を重くします。子どもの未来を担うために母性を支える立場にある看護職は、どう対応すべきか、参加者の皆様と叡智を出し合い看護力の発揮について考えたいと思いました。

叡智とは、「物事の深遠な道理をわかるほどの才能や知性であり、その人の持つ知識や経験、聡明な判断力などの意味が含まれている」と説明されています。私たち看護職は懸命に目の前の母子に対応していますが、新たな方向性を導く叡智に気づいていないのかもしれません。

第22回学術集会では、教育講演2題、特別講演1題、シンポジウム等を企画しております。教育講演Ⅰでは、長年、重症心身障害児家族のQOL支援を行ってきた小林保子先生にこれまで支援を行う中で見えてきた現代母親像についてお話頂きます。教育講演Ⅱでは、母子の愛着

に重要であるタッチングの科学について山口創先生に最新知見をお話頂きます。特別講演では、小田口浩先生に女性の健康支援に向けた漢方医学の活用についてお話頂きます。シンポジウムでは、シンポジストや会場の皆様と叡智を出し合い、母性を支える看護力についてディスカッションしたいと思います。さらに、教育セミナーとして、GDMセミナーを予定しております。多くの一般演題が発表され、そこに提示される叡智を参加者で共有し、実践に活かせる機会となることを願っています。



事務局からのお知らせ

1. 2019年度一般社団法人日本母性看護学会総会報告について

第21回学術集会時に開催されました総会の詳

細については、学会ホームページに掲載される議事録をご参照ください。副理事長を1名から2名とする定款の改定、2019-2022年度評議員

選挙の結果（評議員56名）の報告、2019-2020年度役員承認など、重要な案件が審議され、承認されました。

2. 2018年度理事会について

理事会は通常理事会3回（6月、11月、3月）、書面理事会は6回開催されました。

3. 役員、委員会・部会の体制について

鈴木幸子理事長が引き続き2期目、副理事長を2名とする定款改定が総会で認められ、遠藤

俊子副理事長、石井邦子副理事長の2名体制がスタートします。委員会と各部会について、詳細はHPの「役員の方掌」の表をご参照ください。

4. 第22回日本母性看護学会学術集会のご案内

2020年6月28日（日）島袋香子学術集会長（北里大学看護学部）のもと、第22回日本母性看護学会学術集会を開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。尚、詳細は近く公開予定のHPをご参照ください。

5. 会員のみなさまへのお願い

1) 2019年度会費の支払い

本学会は皆様の会費で運営されております。2019年度会費未納の方は、事務局よりお送りしている郵便振替用紙（青色払込取扱票）を用いるか、あるいは下記の口座番号へ会費の納入をお願いします。

年会費：8,000円

① 郵便振り込みの場合（青色振込取扱票）

口座番号：00120-8-386309 加入者名：一般社団法人日本母性看護学会

② 銀行振込の場合

ゆうちょ銀行 ○一九店 当座 0386309

2) 会員情報登録システム（SOLTI）への情報更新のお願い

ご連絡先・ご所属先等が変更される会員の皆様は、本システムより情報更新をお願いいたします。またEメールアドレスを登録されていない会員の方には、ぜひEメールアドレスの登録をお願いいたします。

また、本学会は、日本学術会議協力団体加盟の準備を進めております。そのため、会員の半数以上が大学教員等の研究者であることが条件となっております。つきましては、会員の皆様には、学会ホームページ（<http://bosei.org/index.html>）の「会員情報照会・更新」バナーから、ご自身の会員ID（会員番号）とパスワードを使って会員情報管理システム＜SOLTI＞にログインしていただき、ご自身で登録情報の修正・追加をしていただきますようお願いいたします。特に、ご所属・役職・性別につきましては、入力漏れのないようにご確認・修正をお願いいたします。なお、オンラインでの修正が難しい場合には、FAXまたはE-mailにて、事務局あてご連絡ください。

学会公式ホームページ【[会員情報照会・更新](#)】

会員ID（会員番号）とパスワードを入力の上、ログインしてください。

事務局（会員窓口）

一般社団法人日本母性看護学会事務局

（株）ガリレオ学会業務情報化センター内

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-1-4F

TEL：03-5981-9824 FAX：03-5981-9852

E-mail g031jsmn-support@ml.gakkai.ne.jp

学会HP <http://bosei.org/index.html>

編集後記

広報担当理事のたった一つの自慢は、ニュースレターの発刊をいつも早く完成させ予定期日には早々と例年発信していたことなのですが、今年は少し発刊が遅れ、まことにすみません。

令和元年は、日本母性看護学会の学会誌のオンライン化という大きなことがありました。きっとアカデミックな変化に、前原先生も喜んでくださっていることでしょう。

また、将来をみすえ理事のメンバーに新しい若手の先生にお入りいただきました。広報担当理事は齋藤一人でしたが、東北大学の中村先生にお入りいただきました。

学会員のお一人お一人の声を拾い上げ学会を発展させ、広く伝えていくことも、広報の大事な任務と考えます。広報としては、まだまだ反省点や課題が多いのですが、学会員の皆様から、こういう部分をニュースに取り上げてほしいなど、積極的にご連絡いただければ大変うれしく存じます。

(文責 広報担当理事 齋藤いずみ)



発行人：鈴木 幸子
発行日：2019年11月30日
広報担当：齋藤いずみ
発行：一般社団法人日本母性看護学会
〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-1-4階
株式会社ガリレオ
学会業務情報化センター内
一般社団法人日本母性看護学会事務局
Tel：03-5981-9824 Fax：03-5981-9852
E-mail：g031jsmn-mng@ml.gakkai.ne.jp
